

## 新入生を迎える(おくり そして むかえる)

著者	島本 昌一
雑誌名	日本文学誌要
巻	51
ページ	181-182
発行年	1995-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019830">http://hdl.handle.net/10114/00019830</a>

## 大学は自分で勉強するところ

いまや大学というところは、学問の殿堂でもなく、まして人生の道標を示してくれる、権威ある教育の最高機関ではなくなった。知識人“という言葉も死語になり、単なる知的技術を学ぶ“場”と化しつつある。しかも進歩的文化的情報機関としても、最先端の“場”とはいえない状態になりつつある。いや、大学というところはもともとそういうものであったのかも知れず、私たちは大学幻想を抱いていたにすぎなかったのだろう。

## 新入生を迎える

新入生の入学する頃は土手の桜も満開になっていることでしょう。大都会のまつただなかにある大学とて他に闊歩するところもない

長谷川 啓

したがって大学に入ったからといって、学問を学ぶうえでも人生の道標を掴むうえでも、自分の身柄をすべて大学に預けてはいけない。自分自身の力で世界をキャッチし、自分で勉強および学問をしていかなければならない。そのような意味で学ぶ“場”として、わが法政大学は恰好の場所といえるかも知れない。私立のプラスマイナスをもっとも合わせ持った大学であり、何よりも野放しといっているほどこんな自由な大学は、日本では稀

島本 昌一

ようですが、その美しい自然に目を留め、ゆつくりと四年間の抱負を確かめてみることは大切なことだと思います。

有といっているだろう。しかしそれは時として、全部自分の責任に嫁せられる過酷な“場”と転ずるかも知れない。いずれにせよこの自由な大学の“場”を、生かすも殺すも本人次第である。心して勉学に励んでいただきたいと思う。

私はこのところ、性差の文化・文学といったことに関心を抱き、研究している。いわゆる女性学、フェミニズムの視点による学問の問い直しだが、この大学では、近・現代の日本文学をそのような立場から批評・研究するゼミを持っている。関心を抱いた方は、ぜひ聴講に来ていただきたい。

(文学部講師)

自分を振り返ってみて、若いころ自然を凝視したりしたことは一度もなく、ただ慌ただしく年月が過ぎていったような気がします。それで一番印象に残ったのは、卒業して大学院に入った時のことでした。先生に君は社会に出ても役に立たない重病患者であるので、ここに入院したのである。しっかり自己点検をして治療に専念するようにと言はれました。

た。とても驚きましたが考えてみると確かにそうでした。大学という場所は多くのすぐれた精神に出会い、自己を発見し磨く所でしょ

うが、私の生活はどうもそうはなっていないかった。ある意味で大学はあの著名な作品『魔の山』の舞台にも似ていましょう。

ところで現在の学生はどうか。昔と異なり様々な免許や資格を取得して、すこぶる勤勉

のようですが、何か欠けている。知識があり、有能なようですが、何か足りないといつも思います。一旦興味をもつたら利害を越えてどこまでも追求していこうという人間がもつといてもよいと思うのですが、いません。淋しい限りです。新人生はまずそのような自分を鍛えぬく人間になってもらいたいと思います。西洋の言葉で学問は Discipline とい

ます。辞書を引いてみると学問のほかに鍛練とか自己規律とかとあります。学問によって鍛えぬかれ、それが人格化されることを要求する言葉でありましょう。

(文学部講師)

生涯をかけて追求する何かを早く発見されること、期待してやみません。

もつと強く、もつと激しく夢見よ、と

浜田 弘美

このたび、日本文学科に入学されたみなさん、おめでとうございます。  
今でも振り返るたびに、顔が火照<sup>ほて</sup>ってきますが、益田勝実先生に「古代和歌芸術史論」(修論)二三四枚を提出したのは、すでに二十年以上も前のこと。タイトルだけは、めつばうデカくて、中身は研究というより、夢見るように歌への思いを、る、綴<sup>つづ</sup>っただけのものでした。あのきびしい先生が、よくお許し下さったと思っています。しかし、その時の歌への夢だけは、今でもくつきりと、生きてい

ます。  
私だけでなく、受験勉強で、複雑怪奇な古典の敬語法に、さんざん苦しまれた諸君も多いのではないでしょうか。二重三重に敬語を駆使し、敬語に囲繞されて生きる平安朝の人々。だが、そこでやりとりされ、歌われる歌には、相手の身分がどのように高くても、ほとんどの場合、敬語は使用されません。歌は、あらゆるものを超越する。それほどまでに全身をこめての、ひたぶるの行為、非日常のことばなのです。そしてこのような歌をい

だいて成長する古代の物語——『伊勢』の小さな物語たちが、私にうったえ続けるのです、もつと強く、もつと激しく夢見よ、と。

かほどまで、歌への夢にうなされ続けてきながら、研究の足どりは遅牛に似て、行く着くはずの淀は、まだ遙か。現在も、歌が歌ならざるものを求めて奮闘する文芸状況——物語出現前夜の古代和歌史の問題について、あれこれ模索し、苦しんでいます。

しんじつ、半生にわたる古典への夢をはぐくみ、育ててきたのは、この法政でした。それゆえ、自己の夢を語ることで、みなさんをお迎えすることばにかえたいと思います。